

佛教大学と私

萱 嶋 八 郎

佛教大学に、今まで専任で10年、嘱託で2年、非常勤講師で2年勤めさせていただきました。赴任して最初に辞令を頂く時、私が近づくと、当時の高橋学長が、私より先に丁重に頭を下げ、「お願いします」と言われました。流石、宗教学校と感動しました。これが佛教大学の第一印象です。何回か勤務先を変えたのですが、それまで辞令を頂く時は、学長（理事長）が無造作に「はい」と手渡すか、妙に威張って御下賜くださるか、そのいずれかでした。佛教大学の学風は、丁重で、礼儀正しく、寛容という最初の印象は最後まで変わりませんでした。在任中、阪神大震災（私は神戸在住）、家内の召天など人生の危機に会う度に、その感を深くしました。中でもスクーリングの講義中、敗血症で倒れた時、適切な処置をして頂きました。5分遅れれば命が無かった、と後で言われました。若い時に肺結核に罹り、身体が弱く、70歳まで生きていまいと妙な確信がありましたが、今、74歳で生きているのは、最後にこのような気風の大学に勤務できたからだと思います。この誌面をお借りし、学長、同僚の先生方、事務職員の方々、卒業生、在校生の皆様に、厚く御礼申し上げたいと思います。

終戦時、中学生の私は、戦後、米国文化をどう理解すべきか迷いました。その時、ある哲学者の「文化はその宗教の表現である」との言葉が強く心に残りました。この言葉が、「文化」に対する私の一生の態度を決めた感じがします。高校生の時キリスト教徒になり、関心の中心は、聖書（キリスト教）の視点から米国（西欧）文化を読み解くことで、具体的研究対象として、詩人エミリ・ディキンソン、小説家ナサニエル・ホーソンに向かいました。キリスト教信仰と近代西欧の反キリスト教思想の狭間で、彼らの態度が極めて曖昧なので、そ

の解明に興味を感じたからです。18～25歳まで、長期療養のため、社会から精神的に隔絶し、孤独感に悩んだ個人的体験も、彼らに魅かれた原因だと思います。ユダヤ系作家、特にバーナード・マラマッドにも関心がありました。西欧社会において集団で差別されたユダヤ人の孤立感に興味があったからです。大学院では、主として、これらの作家・詩人の作品を取り上げ、また学部では、ロバート・フロストの詩をよく読みました。ディキンソンと同じ農村に住む詩人ですが、彼女とは異なり、伝統的宗教に対し曖昧さのない詩を書きました。大学院でディキンソンを読むうちに、予想外に、神秘主義的傾向の強い『ヨハネの黙示録』と『雅歌』への言及が多いことを知り、今後、この問題をまとめたいと思っています。

佛教大学在任中、十分な仕事が出来ず、申し訳なく思っています。ただ、佛教大学で最初の修士論文指導学生の持留浩二氏が母校の立派な専任教員となられ、また嶋田美恵子氏がディキンソンで博士論文を完成されました。在任中、実に、多くのよい学生に恵まれました。感謝の言葉ありません。